神戸～鳴門ルート
全通記念事業

**第17回企画展**

■展示期間

平成10年10月27日[火]～
平成11年 1 月31日[日]
[午前 9:30～午後 5:00]

■入場無料

■展示場所

徳島県立文書館　2階展示室
〒770-8070 徳島市八万町向寺山
TEL.(0886)68-3700

■休館日

毎週月曜日
(月曜が祝日のときはその翌日)
毎月第 3 木曜日
年末年始(12月28日～1月4日)

# 阿波国文庫と

あわのくにぶんこ★あわじのくにぶんこ

# 淡路国文庫

文化の森総合公園　徳島県立文書館

■主催／徳島県立文書館　■後援／神戸～鳴門ルート全通記念事業実行委員会

# 阿波国文庫と蔵書印

古い本には、その本のさまざまな来歴がわかるものがある。本の履歴書とも言うべきものだろうか。それらの本は幾多の人々の手を経て現在に伝わってきたものもあり、それらの人々の大きな知識の糧になっていたことだろう。

来歴を知る手がかりが、序文・あとがき・蔵書印・書き込み・付属物（付箋等）である。中でも蔵書印はさまざまな工夫が凝らされているものも多くおもしろい。

展示のテーマである「阿波国文庫」「淡路国文庫」という文庫にも蔵書印がある。短冊型（長方形）二重枠の中に、楷書体で書かれたわかりやすい蔵書印（写真1・2）である。この印型は、永承六年（一〇五一）に造られた「法界寺文庫」の印や、有名な「金沢文庫」の印と同じ系統であり、最もオーソドックスな蔵書印の形式を踏まえていると言ってよいだろう。

しかし、この印がいつ頃造られどこにどのようにして集められていた本に押されていったのかは、江戸時代末頃に押されたであろうと言うこと以外はっきりしない。だが、これらの蔵書印が押された本が、一時であるにせよ徳島藩の蔵書であったことを示す証拠であることは間違いない。

写真1

写真3

写真2

写真4

※すべて徳島県立図書館所蔵本より

「阿波国文庫」「淡路国文庫」中には他の蔵書印が捺されているものもある。中でも多いのが「柴邦彦図書後帰阿波国文庫別蔵于江戸雀林荘之萬巻楼」と彫られた大きな方形の印（写真3）である。この文庫印には「柴邦彦」（柴野栗山：徳島藩儒のち江戸幕府儒員）の旧蔵図書を後（死後か）阿波国文庫に帰す（寄贈する）こと、しかし阿波国文庫本体とは別蔵されており、江戸深川にあった徳島藩の別邸である雀林荘内に萬巻楼という書庫を造って、そこに収蔵したこと、を記している。本の来歴をはっきりさせるために萬巻楼に移されたときに整理され印が押されたと考えるべきだろう。このように蔵書の来歴を記した蔵書印はめずらしいものである。阿波国最近文明資料には、編者の知人中川松園の談として、「萬巻楼は、楼といっても土蔵で二間（約三・六メートル）に三間（約五・四メートル）ぐらいのもので、江戸在勤の時土用の虫干しを手伝わされた」と書いており、資料保存の苦労が忍ばれる。

また、「不忍文庫」という小さな短冊型の蔵書印（写真4）が押されているものも多い。これは、屋代弘賢（江戸幕府右筆・国学者）の所蔵本だったことを示している。屋代は江戸上野の不忍の池のほとりに住んでおり、敷地内に倉庫を三棟建て五万冊の蔵書を誇っていた文庫に池の名をとって「不忍文庫」としていた。柴野栗山とも交流が深く、学問好きで知られた十二代徳島藩主蜂須賀斉昌との交流も生まれ、死後「不忍文庫」の多くが「阿波国文庫」の中に含まれることになった。

このほかにも江戸時代後期の国学者細井貞雄の蔵書印である「詩華堂」印や、同じく古典学者の加茂季鷹の蔵書印である「鳳鳥館」印など、柴野栗山や屋代弘賢との関係が推測される学者の蔵書印を見ることができる。

江戸時代後期の江戸で活躍した学者である柴野栗山と屋代弘賢、この二人の集めた蔵書が含まれることによって徳島藩の「阿波国文庫」は有数の大名文庫として世に知られるようになったのである。

# ごあいさつ

第十七回企画展は「阿波国文庫と淡路国文庫」といたしました。両文庫とも阿淡両国藩主蜂須賀家代々が長期間にわたって収集した和漢典籍の蔵書であります。この中には寛政期の儒官・柴野栗山や国学者・屋代弘賢の蔵書が含まれており、六万冊もの一大集書であります。このように多くの蔵書数と貴重な和漢古典本は近世大名家の中でも特筆されるものであり、阿波藩主や藩士の文武両道の基礎をなした文庫として有名であります。

蜂須賀家と言えば家祖・小六のイメージが強く、映画やテレビに登場する小六役が筋骨逞しいスポーツマンの役者で、知略よりも行動力を第一義とした役づくりのために固定観念ができあがっています。しかし、実際の蜂須賀家は外様大名として智謀計略にさえ、沈着励行な判断力は一朝一夕に培かわれたものでなく、その礎を成し得たものは阿波国文庫を中心とした学問の奨励であったことは言うまでもありません。

この阿波国文庫の三万余冊が昭和三年に徳島県と寄託契約が成立し、県立光慶図書館に所蔵されましたが、特別公開後は全国の研究者が一度は訪れるなど、学界に大きな波紋を投げかけた書籍類でありました。しかし、昭和二十年の徳島大空襲と再建後の県立憲法記念館の失火で全てが焼失してしまいました。このことえの懐古と無念さは「図書館五十年史」で詳細に記載されています。

その後、市井に流出していた阿波国文庫は購入されたり、寄贈されたり、あるいは県外のみならず国外にまでも所蔵されていることが判明いたしましたが、蔵書の一部分にしか過ぎません。

この企画展では阿波国文庫の由来や蜂須賀家の好学による蔵書類を知っていただき、徳島県民として受け継いで行かなければならない貴重な文献であることを御理解いただければ幸いであります。

展示にあたり資料を提供いただきました徳島県立図書館、洲本市立図書館・洲本市立淡路文化史料館、専修大学図書館及び個人所蔵者・森末千、原由美子両氏等には心より御礼申し上げます。

平成十年十月二十七日

徳島県立文書館長　小林勝美

同年一月二四日、京都を出発し城下助任土手町（現中前川町）の荒木政十郎の旧宅を賜わり居住した。しかし、翌年の明和五年（一七六八）春の郷里牟礼への帰省に引き続き、七月には世子治昭の侍読として江戸に赴くこととなったため、活動の中心は京都・江戸に移り、栗山の生涯で徳島滞在は、わずか数か月にすぎなかった。侍読に就任したとき治昭は十二才、以後四年間勤めたが、その期間は、鋭意藩政改革に取り組んできた重喜が幕府から隠居を命じられるという事件（明和六年十月）が起こり、十三才にして治昭が十一代藩主に就任した時期と重なる。以来治昭は、父重喜の果たせなかった藩政改革を成功に導き、少年期に教えを受けた栗山の影響が大きかったと考えられる。

栗山が阿波藩儒として阿波藩に仕えたのは、明和四年（一七六七）三十二才から天明七年（一七八七）五十二歳の招幕までの二十年に及ぶが、この間、江戸や京都で多くの儒学者や文化人と交流し、また、明和八年（一七七一）三十六才の時、京都堀川に私塾を開き、翌年十一月には小浜藩京都留守居役藤田和左衛門の次女順と結婚するなど、学問研究上のみならず、家庭生活においても充実した時期であった。

柴野栗山

※この略伝の年代と事績は、柴野栗山の養子柴野碧海著『柴野家世紀聞』の記事を基礎とし、一部年代等を訂正した。

「萬巻楼本」と呼ばれるようになった。これら「萬巻楼本」の多くは、徳島城内に所蔵されていた本等とともに「阿波国文庫」に収録された。

また多くの「萬巻楼本」は文化十二年（一八一五）から文政四年（一八二一）まで徳島藩洲本学問所の督学を勤めた、栗山の京都時代の弟子で阿波藩儒であった横野鏡山が洲本赴任の際に教材として江戸から洲本に持ち込んでいる。これらはそのまま洲本にとどめれ多くは津名郡教育会に収蔵された。徳島城内に持ち込まれた「萬巻楼本」の多くは失われたが、洲本に多くの本が残されており、柴野栗山の学問に対する情熱の面影を今に伝えている。

屋代弘賢は、通称太郎また太郎吉ともいい、諱は初め詮虎のちに詮賢、弘賢と改め七十になって詮文と改めた。号は輪池。代々幕府の御家人の家系で江戸神田明神下に住んでいた。父忠太夫、祖父郷助、また母・祖母そろって能書家の聞こえが高かった。弘賢も七才のときから幕府右筆役の森伝右衛門の元で書を学び、天明元年（一七八一）西ノ丸台所に出仕、同六年（一七八六）には本城附書役となった。寛政四年（一七九二）幕府儒員柴野栗山に随行して、近畿の社寺調査にあたる。

この時、薬師寺の三重塔（東塔）の相輪擦銘（現在は本薬師寺のものを模刻したものといわれる）を採取し、そのときのことは紀行文「道の幸」は『存彩叢書』に収められている。

翌五年（一七九三）松平定信に取り立てられ奥右筆所詰（支配勘定格、百俵のち勘定格百五十俵）となり、『寛政重修諸家譜』を始めとする幕府の編纂事業に参加した。文化年間には近海に出没するロシア人への諭書や、朝鮮通信使への返書なども担当した。

弘賢の書道は持明院流で、古学に関しては塙保己一らに師事して講談会の会頭の一人にもなっており、柴野栗山を始め学者との交友も広かった。

若いときは、貧乏で書籍の閲覧にも苦労していたが、その後収集に努め蔵書は五万冊、参考古器物も山のように集めていたとされている。そのころ上野不忍池の池畔に住んでおり、倉庫を三宇建ててそれらを管理し「不忍文庫」と称していた。この「不忍文庫」が死後、徳島藩主蜂須賀斉昌に寄贈され、徳島城に持ち込まれることになった。

# 柴野栗山（しばのりつざん）と萬巻楼（まんがんろう）本について

## 昌平黌就学まで

柴野栗山は、名を邦彦、字は彦輔、通称を彦助と言い、元文元年（一七三六）、讃岐国三木郡牟礼村（現在木田郡牟礼町牟礼）に父平左衛門・母沢の長男として生まれた。生家の東北方には、五剣山（八栗山）がそびえており、号の「栗山」は、これにちなんだものであった。実家は農業を営み裕福ではなかったが、父親には学問の素養と理解があり、十三才の寛延元年（一七四八）、高松藩儒の後藤芝山に入門した。栗山は、牟礼から高松の芝山の塾まで、片道二里の道程を毎日通っていたという。その後、栗山十八才の宝暦三年（一七五三）、高松藩儒中村文輔に従い、江戸へ出府し、昌平黌の中村蘭林に学ぶこととなった。昌平黌就学中の宝暦十三年（一七六三）に、栗山は幕府に上書（『栗山上書』）を上提している。この上書ではまず、政治には為政者の「恩」と「威」が重要であることを強調し、為政者のあるべき姿を論じ、また、武士・代官、農民、盗賊取締りなどについて、具体的な施策を様々な事例を挙げながら論じており、栗山の思想をよく表しているとされる。

## 京都滞在から徳島藩儒者へ

栗山は三十歳の明和二年（一七六五）、国学の研究のため、京都の高橋図南のもとに赴いた。京都で交友のあった人物の中に、阿波藩儒の合田如玉がいた。合田の勧めにより、明和四年（一七六七）八月二十三日、阿波藩儒に登用されることとなった（禄高一五〇石）。当時の十代阿波徳島藩主蜂須賀重喜は、藩政改革に意欲的な好学の青年藩主であった。

## 幕府儒員時代

天明七年（一七八七）五十二歳の秋、栗山を招聘するとの幕命が蜂須賀治昭に下り、栗山は幕府の儒員となった。以後阿波藩儒は、実弟貞穀の子で養子の允升（柴野碧海）が継いだ。幕府儒者となった栗山は、松平定信らによる「寛政の改革」に参画するのであるが、この一連の改革において栗山は、皇居の再建などとともに「異学の禁」に深く関係した。「異学の禁」は、寛政二年（一七九〇）五月から大学頭林信敬・岡田寒泉と栗山・尾藤二洲・古賀精里のいわゆる「寛政の三博士」が中心となって、実施した一連の学制改革である。昌平黌内での朱子学以外の講義を禁じたことから、学問の自由な研究を阻害するものとして、当初から朱子学派以外の学者から非難の声があがったが、栗山らの意図は、多くの学派に分かれて乱脈化した儒学を整理し、朱子学を学問の基本に据えることにあり、昌平黌外での他学派の学問研究を規制するものではなかった。寛政五年（一七九三）七月、定信退任により「寛政の改革」は一応終了するが、栗山はその後も、西丸奥儒者として将軍世子（後の十二代将軍家慶）の教育にあたるなど学問研究と教育に活躍した。文化四年（一八〇七）十二月一日、江戸駿河台の私邸にて七十二才にて死去。

## 柴野栗山と「萬巻楼本」

栗山の日々の生活は、極めて質素であったが、書物の購入だけは金銭を惜しまなかった。このため、その生涯に収集した蔵書は、九千余巻に達した。これら膨大な蔵書は栗山の遺言によって、阿波藩に寄贈された。藩はこれらの蔵書を江戸深川の藩邸内に

# 屋代弘賢（やしろひろかた）と不忍文庫（しのばず）

屋代弘賢

徳島県立図書館所蔵

徳島県立図書館所蔵

森末氏所蔵

## 九条兼実

### 『玉葉』（ぎょくよう）

平安時代末から鎌倉時代の始めにかけて、公卿であり後鳥羽天皇の摂政・関白であった九条兼実の日記。長寛二年（一一六四）閏十月十七日兼実十六才のときから建仁三年（一二〇三）五十五才まで約四十年にわたる。欠けた部分も少しあるが、平氏最盛期から鎌倉幕府の創設期にあたる重要な時期の政務の中枢にあった人の日記だけに、政治史料としての価値は極めて高いといえよう。雌伏後、源頼朝の後援により摂政の地位に就いたため朝廷と幕府の両方に行き届いた情報が込められている。

森末氏所蔵の阿波国文庫のなかに、写本で本編六十九冊・玉葉目録一冊・玉葉別記一冊の計七十一冊が残されている。この写本には文化九年（一八一二）頃に沙弥源昌が筆写したという記録と花押が残されている。この源昌は、細井貞雄という国学者で、旧本が焼けて失われてしまったために筆写したことが書かれており、本の伝来を考える上でも興味深い。

## 塙保己一

### 『蛍蠅抄』（けいようしょう）

江戸時代の国学者、塙保己一の編集した外寇に関する資料集。文化八年（一八一一）に編纂し本文五巻付録一巻の計六巻。九代開化天皇十九年記から応永二十六年（一四一九）の応永の外寇（朝鮮の対馬来襲）までを記録。

編集の主眼は文永・弘安の役（蒙古来襲）の史料集成にあった。ロシアの南下やイギリス船の長崎入港など対外的な社会不安の中で、蒙古来襲を研究することによって外圧に対する防衛力の担い手である武士を鼓舞しようとしたものである。蒙古襲来の初めての本格的な史料集としての価値が高い。「史籍集覧」二三などに所収されている。

徳島県立図書館には、阿波国文庫本として二系統の「蛍蠅抄」が所蔵されている。一系統は文化八年の序が入った写本六冊、もう一系統は嘉永四年刊の木版本六冊である。このほかにも個人蔵の阿波国文庫本には享和元年（一八〇一）と塙保己一校合の序が入った「貞信公記」の写本があり、親交の深かった屋代弘賢との関係によって写本が含まれるようになったとも考えられる。

## 新井白石

### 『白石遺文』（はくせきいぶん）

江戸時代中期の儒学者・政治家である新井白石（一六五七―一七二五）の著した史論、序文類、漢詩文を白石の死後、水戸藩儒の立原翠軒（一七四四―一八二三）が編集した文集である。現在、同文集は写本しか残っていないが、この本もそのうちの一冊である。

この本の目録の頁には、「阿波国文庫」印とともに「不忍文庫」印が捺されており、屋代弘賢の蔵書であったことがわかる。本文一頁上欄には、「以朱点者対真蹟所校正也、真蹟在土肥元吉家、文化十一年二月」と朱書してあり、本文全体に朱筆で訂正していることから写本のおおよその経緯を知ることができる。この本の原本の所有者の土肥元吉は、白石の弟子で白石の著書の清書を担当していた土肥元成の子孫であると思われる。また、写筆された文化十一年（一八一四）二月当時、屋代弘賢は五十六才であったことから、屋代自身の筆写・訂正の可能性が高い。

# 阿波国文庫と淡路国文庫の成立

六万冊を誇ったとされる「阿波国文庫」は、五万冊の蔵書をあったという屋代弘賢の「不忍文庫」と、九千冊あったとされる柴野栗山の「萬巻楼本」の藩主に関係の深い二人の学者による両文庫が中心にになっていたことは間違いないだろう。

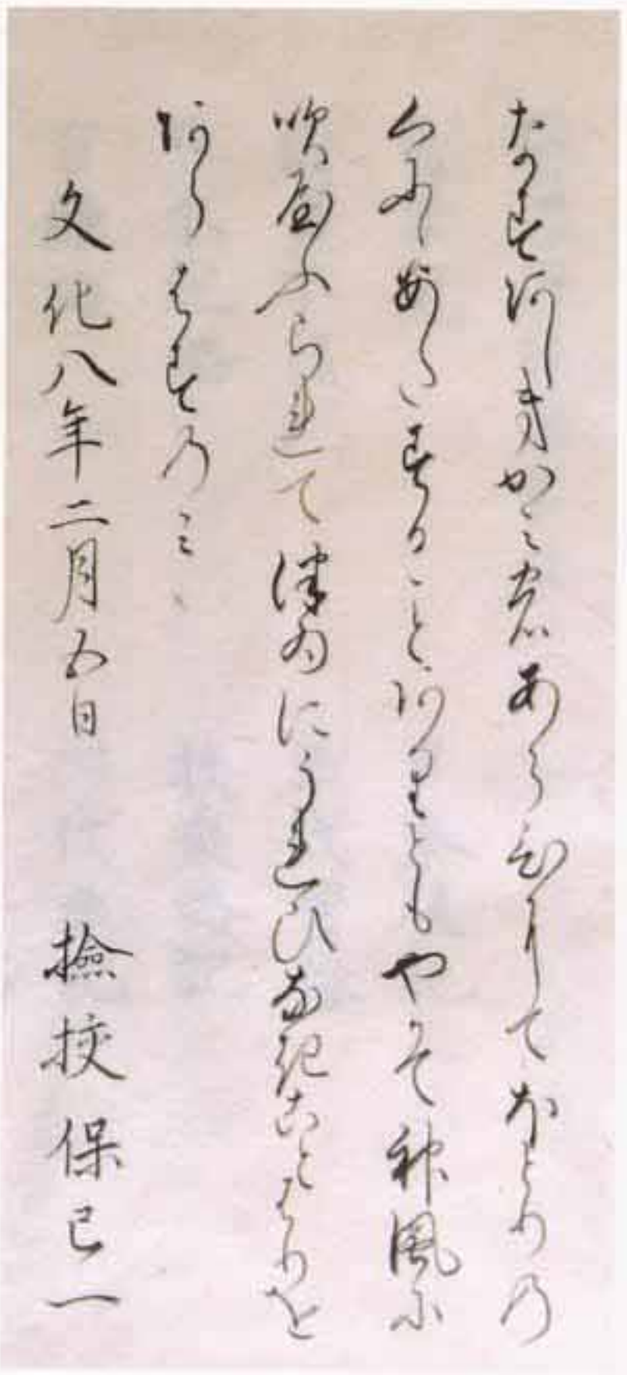
しかし、この二人の学者以外にも「阿波国文庫」の成立に関わった人々がいる。伊勢貞丈もその一人である。徳島県立図書館には伊勢の『本朝王代図略圖』『愚得随筆』が残されている。また森末氏所蔵本の中にも蜷川親元の『日々記』を写したものが残されている。伊勢は、享保二年（一七一七）生まれで、号は安斎。室町幕府の政所執事の家柄で、幕臣である。家学の故実を学び、国学が形成されていく風潮の中で、多くの著書を生んでいる。本朝王代図略圖には「不忍文庫」の印が押されており、屋代の収集本であった可能性がある。

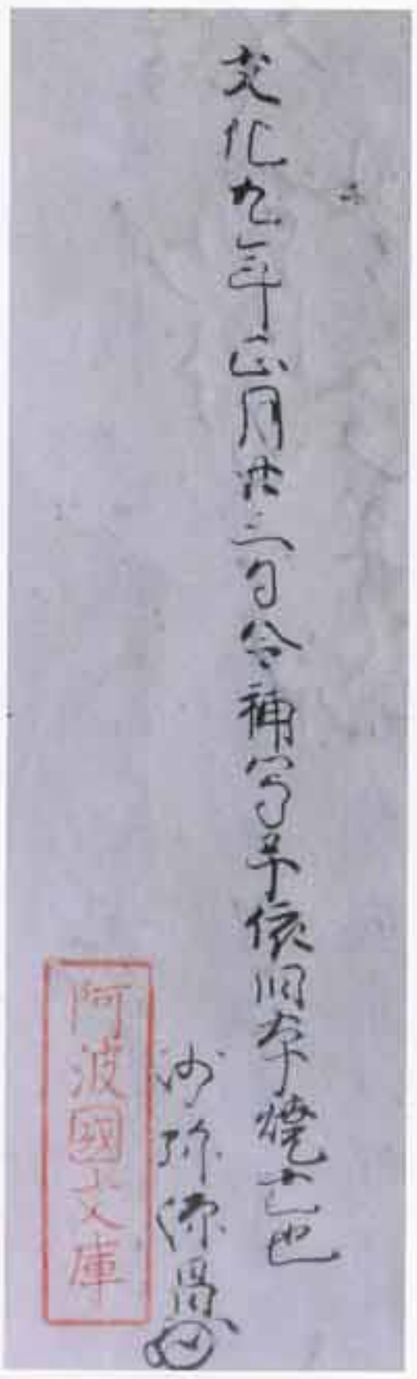
また、塙保己一の関わった本も多い。徳島県立図書館所蔵の『蛍蠅抄』や森末氏所蔵本の『貞信公記』などである。塙は江戸時代後期の国学者で、延享三年（一七四六）生まれで、『群書類従』の編纂はあまりにも有名である。文政四年（一八二一）七十六才で没している。屋代は塙を師としており、その関係で本が含まれた可能性が高いと思われる。

さらに、森末氏所蔵本には安田蒼生・源貞雄・細井源昌・沙弥（僧、得度をしたばかりの人の意）源昌という人物が、寛政～文化期に本を筆写した人として現れる。筆跡等からしてどうも同一人物のようである。徳島県立図書館所蔵本の中にも源蒼生が筆写した写本が残されている。これらは、細井貞雄という一人の人物であるようだ。細井は、安永元年（一七七二）に生まれ、通称藤十郎、号は昌阿（源昌は、源性の昌阿の意か）といい、家号を詞華堂という。細井源昌が写した『家記年月考』には、「詞華堂」の印もある。江戸のひとで、幕府桶御用が家業であったが、幼いときより学問を好み、浅草伝法院の側に住んで、古学や有職故実をを学んだとされている。文政六年（一八二三）九月二日没、五十二才。この人物が蜂須賀家と関わりがあったかどうかは不明だが、年齢から活躍したと思われる時期に、阿波国文庫の写本を作成していた。

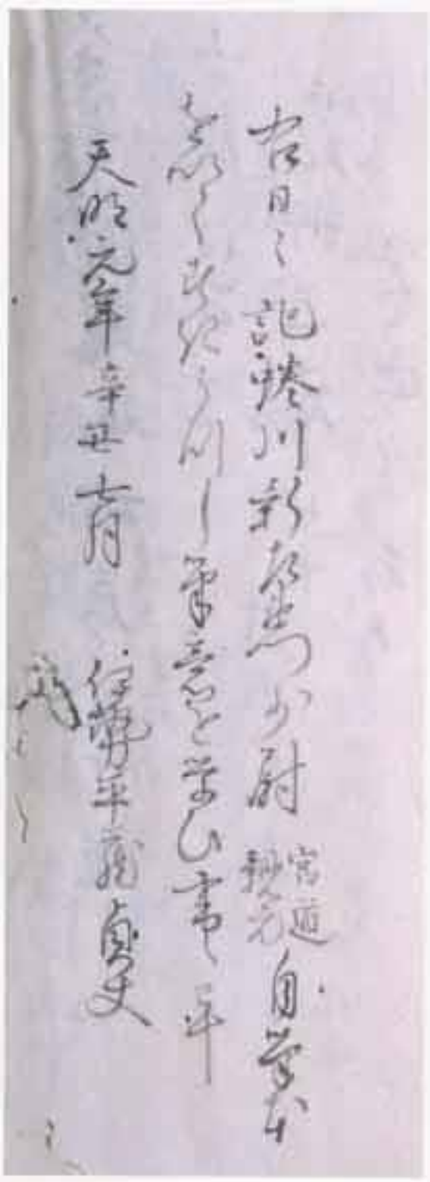
また、江戸時代後期の歌人で古典学者の加茂季鷹の蔵書も多く含まれている。「鳳鳥館」とある蔵書印の本がそれである。加茂は宝暦四年京都に生まれ、十九才で江戸に下って学事に励み、三十八才で帰京し、賀茂別雷神社の神官となった文人である。天保十二年（一八四一）十月九日に八十八才で没している。

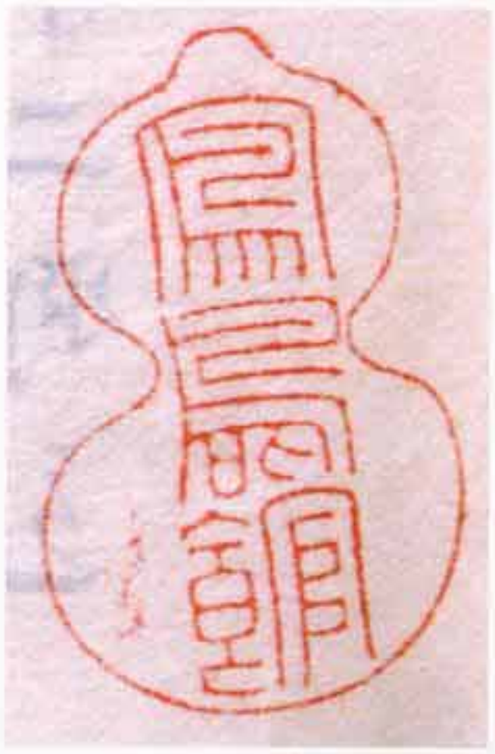
柴野・屋代・伊勢・塙・細井・加茂の活躍した時代、徳島藩主は、蜂須賀重喜（柴野を藩儒とした）・治昭（柴野が侍講であった）・斉昌（文事を好み阿波国文庫を整備したとされる）の三代であった。儒学を振興し、学問を好んだ藩主の元に、多くの学者が集い本が集まり、巨大な大名文庫である「阿波国文庫」「淡路国文庫」が生まれたのである。


検校保己一（塙保己一）の序



沙弥源昌（細井貞雄）の書


伊勢貞丈の書


鳳鳥館の印

詞華堂の印

※全て森末氏所蔵本より

# 森末義彰氏収集 阿波国

| | 原本ラベル | 書　名 | 冊数 | 作　者 | 種別 | 印 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 9-5-1 | 水左記 | 1 | 源俊房 | 日記 | 阿/○ | |
| 2 | 78-1-7 | 斎藤民部丞親基記 | 1 | 斎藤親基 | 日記 | 阿/○ | |
| 3 | 78-1-11～12 | 殿中日々記　上・下 | 2 | 蜷川親元 | 日記 | 阿/○ | |
| 4 | 78-1-13～15 | 日々記 | 3 | 蜷川親元 | 日記 | 阿/○ | 天明元　伊勢貞丈写 |
| 5 | 78-1-16～19 | 御浄明珠院殿御記 | 4 | 二条康道 | 日記 | 阿/○ | 130と同本 |
| 6 | 78-1-20～23 | 顕広王記 | 4 | 顕広王(白川) | 日記 | 阿/○ | |
| 7 | 78-1-24～26 | 看聞御記 | 3 | 伏見宮貞成親王(後崇光院) | 日記 | 阿/○ | 91と同本 |
| 8 | 78-1-27 | 官史記 | 1 | | 記録 | 阿/○ | |
| 9 | 78-1-28 | 口言部類 | 1 | 中御門宗忠 | 部類記 | 阿/○ | |
| 10 | 78-1-29 | 永正日々記 | 1 | | 日記 | 阿/○ | |
| 11 | 78-1-30～33 | 岡屋関白記 | 4 | 近衛兼経 | 日記 | 阿/○ | 安田蒼生写 |
| 12 | 78-1-34～37 | 神祇伯業資王記 | 4 | 白川業資王 | 日記 | 阿/○ | 107と同本 |
| 13 | 78-1-39～42 | 忠昌王記 | 4 | 白川忠富王 | 日記 | 阿/○ | 宝暦8　左中将藤写 |
| 14 | 78-1-43～46 | 猪隈関白記 | 4 | 近衛家実 | 日記 | 阿/○ | |
| 15 | 78-1-56 | 執政所抄 | 1 | | 有職故実 | 阿/○ | 寛政元藤原以文謄写 |
| 16 | 78-1-58 | 庁宣記 | 1 | | | 阿/○ | |
| 17 | 145-1-1～3 | 江記　1～3 | 3 | 大江匡房 | 日記 | 阿/○ | 111と同本 |
| 18 | 145-1-4～5 | 月中記　乾坤 | 2 | 葉室定嗣 | 日記 | 阿/○ | 112と同本 |
| 19 | 145-1-6 | 嘉応元年記 | 1 | | | 阿/○ | |
| 20 | 145-1-7～9 | 野府記 | 3 | 藤原実資 | 日記 | 阿/○ | |
| 21 | 145-1-11 | 法勝寺新御堂供養用度(勘文)宇治殿高野詣記 | 1 | 平範国 | 記録 | 阿/○ | がんぴ紙使用 |
| 22 | 145-1-12 | 基俊卿記　完 | 1 | 堀河基俊 | 日記 | 阿/○ | |
| 23 | 145-1-14～1 | 公頼公記 | 2 | 転法輪三条公頼 | 日記 | 阿/○ | |
| 24 | 145-1-16 | 貴嶺記 | 1 | 中山忠親 | 日記 | 阿/○ | 82と同本 |
| 25 | 145-1-17 | 小槻頼胤記 | 1 | 小槻頼胤 | 記録 | 阿/○ | 52.90と同本 |
| 26 | 145-1-18 | 九暦 | 1 | 九条師輔 | 日記 | 阿/○ | 天明辛丑　源貞雄写 |
| 27 | 145-1-19～2 | 仁部記　上・下 | 2 | 日野資宣 | 日記 | 阿/○ | |
| 28 | 145-1-21 | 萬一記 | 1 | 万里小路宣房 | 記録 | 阿/○ | |
| 29 | 145-1-22 | 雅実公記 | 1 | 久我雅実 | 日記 | 阿/○ | 106と同本 |
| 30 | 145-1-23 | 深心院関白記 | 1 | 近衛甚平 | 日記 | 阿/○ | 源貞弘とあり |
| 31 | 145-1-24 | 今出川内相府記 | 1 | 西園寺実衡 | 日記 | 阿/○ | 123と同本 |
| 32 | 145-1-25 | 心記　全 | 1 | 樋口定能 | 日記 | 阿/○ | 97と同本 |
| 33 | 145-1-26 | 後竹林院左相府記 | 1 | 西園寺実遠 | 日記 | 阿/○ | |
| 34 | 145-1-27 | 実経大納言記 | 1 | 一条実経 | 日記 | 阿/○ | 100と同本　文化壬申細井源昌写 |
| 35 | 145-1-28 | 中内記　全 | 1 | 藤原宗能 | 日記 | 阿/○ | |
| 36 | 145-1-29～3 | 嵩恩院惟房卿記　1～2 | 2 | 万小路惟房 | 日記 | 阿/○ | |
| 37 | 145-1-31 | 定基卿記 | 1 | 野宮定基 | 日記 | 阿/○ | |
| 38 | 145-1-32～33 | 大府記　上・下 | 2 | 藤原為房 | 日記 | 阿/○ | 73と同本　戊午源貞雄とあり |
| 39 | 145-1-34～35 | 御湯殿記 | 2 | | 日記 | 阿/○ | |
| 40 | 145-1-36 | 左衛門権佐平定家記 | 1 | | | 阿/○ | |
| 41 | 145-1-37 | 後鳥羽院御記 | 1 | 後鳥羽天皇 | 日記 | 阿/○ | |
| 42 | 145-1-38～39 | 醍醐地蔵院日記　上・下 | 2 | 房玄 | | 阿/○ | |
| 43 | 145-1-40 | 葉黄記 | 1 | 葉室定嗣 | 日記 | 阿/○ | 109と同本 |
| 44 | 145-1-41 | 宗建卿記 | 1 | 難波宗建 | 日記 | 阿/○ | 113と同本 |
| 45 | 145-1-42～43 | 吉続別記　1～2 | 2 | 吉田経長 | 日記 | 阿/○ | |
| 46 | 145-1-44～45 | 拾芥記　上・下 | 2 | 五条為学 | 日記 | 阿/○ | |
| 47 | 145-1-46 | 後円光院関白記 | 1 | 鷹司冬教 | 記録 | 阿/○ | |
| 48 | 145-1-47～48 | 法性寺関白記　上・下 | 2 | 藤原忠通 | 日記 | 阿/○ | |
| 49 | 145-1-49 | 親綱卿記　完 | 1 | 中山親綱 | 日記 | 阿/○ | |
| 50 | 145-1-50 | 知足院関白記 | 1 | 藤原忠実 | 日記 | 阿/○ | |
| 51 | 145-1-51 | 野宮内相府記 | 1 | 徳大寺公清 | 日記 | 阿/○ | 71と同本　延宝２内大臣 |
| 52 | 145-1-52 | 長興宿祢記 | 1 | 小槻頼胤 | 記録 | 阿/○ | 25.90と同本 |
| 53 | 145-1-53 | 実隆公記<br>公頼公記<br>公條公記 | 1 | 三条西実隆<br>転法輪三条公頼<br>三条西公條 | 日記 | 阿/○ | |
| 54 | 145-1-54 | 後京極摂政良経公別記 | 1 | 藤原良経 | 日記 | 阿/○ | |
| 55 | 145-1-55 | 京極摂政師実公家司記 | 1 | | 日記 | 阿/○ | 127と同本 |
| 56 | 145-1-56 | 玉英 | 1 | 一条経通 | 日記 | 阿/○ | |
| 57 | 145-1-57 | 官槐記 | 1 | | 日記 | 阿/○ | |
| 58 | 145-1-58 | 陰陽頭安倍泰親朝臣記　全 | 1 | 安倍泰親 | | 阿/○ | 101と同本 |
| 59 | 145-1-59 | 経実卿記 | 1 | 藤原経実 | 日記 | 阿/○ | 99と同本 |
| 60 | 145-1-60 | 天聴集 | 1 | 後奈良天皇 | 日記 | 阿/○ | 源貞雄とあり |
| 61 | 145-1-61～63 | 妙槐記抄　1～3 | 3 | 花山院師継 | 日記 | 阿/○ | 92と同本 |
| 62 | 145-1-64 | 貞信公記 | 1 | 藤原忠平 | 日記 | 阿/○ | 享和元検校保己一校合とあり |
| 63 | 145-1-65 | 宣秀公記 | 1 | 中御門宣秀 | 日記 | 阿/○ | |
| 64 | 145-1-66 | 定家卿熊野道之間愚記　全 | 1 | | | | |

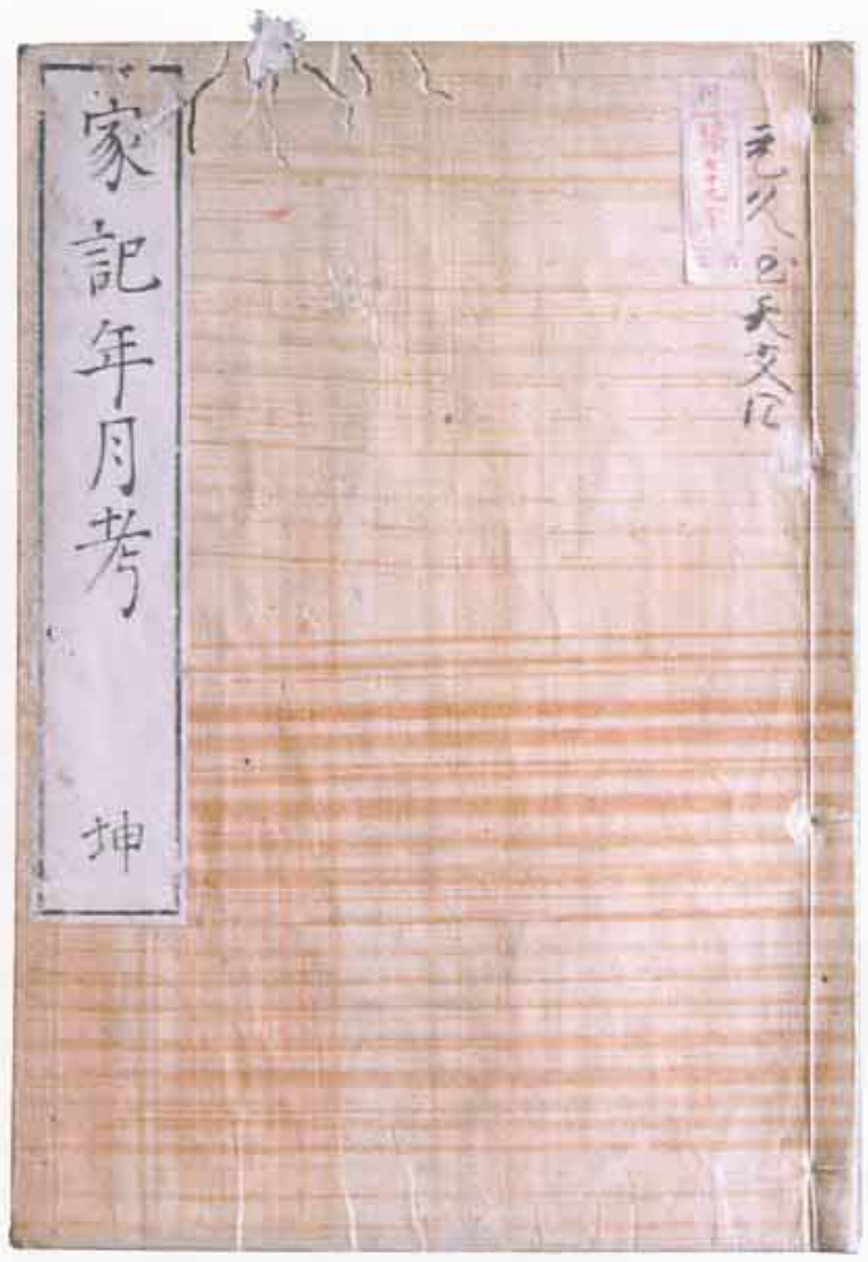
# 文庫目録

| | 原本ラベル | 書　名 | 冊数 | 作　者 | 種別 | 印 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 65 | 145-1-67 | 峯相記 | 1 | | 寺社・地誌 | 阿/○ | |
| 66 | 145-1-68 | 吉槐記 | 1 | 吉田定房 | 日記 | 阿/○ | |
| 67 | 145-1-69 | 大治四年記　全 | 1 | | | 阿/○ | |
| 68 | 145-1-70 | 時信記 | 1 | 平時信 | 日記 | 阿/○ | |
| 69 | 145-1-72 | 松亜記　全 | 1 | 松殿忠嗣 | 日記 | 阿/○ | |
| 70 | 145-1-73 | 難波宗城卿記 | 1 | 難波宗城 | 日記 | 阿/○ | |
| 71 | 145-1-74 | 公清公記 | 1 | 徳大寺公清 | 日記 | 阿/○ | 51と同本　延宝２内大臣右大将 |
| 72 | 145-1-75 | 都玉記 | 1 | 日野資実 | 日記 | 阿/○ | 戊午　源蒼生　写 |
| 73 | 145-1-76 | 為房記　全 | 1 | 藤原為房 | 日記 | 阿/○ | 38と同本 |
| 74 | 145-1-78 | 普光園院殿記 | 1 | | | | |
| 75 | 145-1-79 | 兼宣公記 | 1 | 広橋兼宣 | 日記 | 阿/○ | |
| 76 | 145-1-81 | 為経記 | 1 | 甘露寺為経 | 日記 | 阿/○ | 寛政丙辰源政久校合とあり |
| 77 | 145-1-82～84 | 花園院御記　1～3 | 3 | 花園天皇 | 日記 | 阿/○ | |
| 78 | 145-1-85 | 花園院震記 | 1 | 花園天皇 | 日記 | 阿/○ | |
| 79 | 145-1-86～88 | 長承三年記　上・中・下 | 3 | | | 阿/○ | |
| 80 | 145-1-89 | 都記　2 | 1 | 源経信 | 日記 | 阿/○ | 11 4 と同本 |
| 81 | 145-1-90～92 | 竹林院左相府記 | 3 | 西園寺公衡 | 日記 | 阿/○ | |
| 82 | 176-2-2 | 三槐抄　中 | 1 | 中山忠親 | 日記 | 阿/○ | 24と同本 |
| 83 | 179-10-1～3 | 人車記　上・中・下 | 3 | 平信範 | 日記 | 阿/○ | |
| 84 | 301-1-1～69 | 玉葉　1～69 | 69 | 九条兼実 | 日記 | 阿/○/生 | 写の記録あり |
| 85 | 302-2-1 | 玉葉目録 | 1 | 九条兼実 | 日記 | 阿/○/生 | |
| 86 | 302-2-2 | 玉葉別記 | 1 | 九条兼実 | 日記 | 阿/○/生 | |
| 87 | 302-4-1～28 | 大外記師時記　1～28 | 28 | 源師時 | 日記 | 阿/鳳 | |
| 88 | 363-1-1～5 | 後二条関白記 | 5 | | | 阿/鳳/立 | |
| 89 | 363-5-1 | 大外記清原良季記 | 1 | 清原良季 | 記録 | 阿/○ | |
| 90 | 363-6-1 | 小槻頼胤記 | 1 | 小槻頼胤 | 記録 | 阿/○ | 25.52と同本 |
| 91 | 363-7-1 | 官史記 | 1 | | 記録 | 阿/○ | 8と同本 |
| 92 | 363-11-1～3 | 妙槐記　1～3 | 3 | 花山院師継 | 日記 | 阿/○ | 61と同本 |
| 93 | 363-12-1 | 広光卿記 | 1 | 町広光 | 日記 | 阿/○ | |
| 94 | 363-13-1 | 寛喜元年記 | 1 | | | 阿/○ | |
| 95 | 363-14-1 | 得生院右相府記 | 1 | | | 阿/○ | |
| 96 | 363-15-1 | 治暦大饗記 | 1 | | | 阿/忍/外1 | 寛政元　北直光 |
| 97 | 363-17-1 | 心記 | 1 | 樋口定能 | 日記 | 阿/○ | 32と同本 |
| 98 | 363-20-1～4 | 忠富王記 | 4 | 白川忠富王 | 日記 | 阿/○/鳳 | |
| 99 | 363-22-1 | 経実卿記 | 1 | 藤原経実 | 日記 | 阿/○ | 59と同本 |
| 100 | 363-23-1 | 実経大納言記 | 1 | 一条実経 | 日記 | 阿/○ | 34と同本　文化壬申細井源昌一 |
| 101 | 363-24-1 | 陰陽頭安倍泰親朝臣記　全 | 1 | 安倍泰親 | | 阿/○ | 58と同本 |
| 102 | 363-25-1～29 | 宣胤卿記　1～29(3,20欠) | 27 | 中御門宣胤 | 日記 | 阿/鳳 | |
| 103 | 364-1-1～35 | 康富記　1～35 | 35 | 中原康富 | 日記 | 阿 | 寛政丙辰　安田貞雄校合 |
| 104 | 364-2-1～14 | 建内記　1～14 | 14 | 万里小路時房 | 日記 | 阿 | |
| 105 | 364-5-1～5 | 寛喜記　1～5 | 5 | | | 阿 | |
| 106 | 364-6-1 | 雅実公記 | 1 | 久我雅実 | 日記 | 阿/○ | 29と同本 |
| 107 | 364-8-1～4 | 神祇伯業資王記　1～4 | 4 | 白川業資王 | 日記 | 阿/○ | 12と同本 |
| 108 | 364-9-1～6 | 伏見院御記　1～6 | 6 | 伏見天皇 | 日記 | 阿 | |
| 109 | 364-10-1～6 | 難波宗建卿記　1～6 | 6 | 葉室定嗣 | 日記 | 阿 | 40と同本 |
| 110 | 364-11-1 | 大外記師元記 | 1 | 中原師元 | 日記 | 阿/○ | |
| 111 | 364-13-1～3 | 江記　1～3 | 3 | 大江匡房 | 日記 | 阿/○ | 17と同本 |
| 112 | 364-14-1～2 | 月中記　乾坤 | 2 | 葉室定嗣 | 日記 | 阿/○ | 18と同本 |
| 113 | 364-15-1～2 | 吉続別記　1～2 | 2 | 難波宗建 | 日記 | 阿/鳳 | 45と同本 |
| 114 | 364-16-1～7 | 師記　1～7 | 7 | 源経信 | 日記 | 阿/鳳 | 80と同本　安田蒼生貞雄とあり |
| 115 | 364-17-1～8 | 仲資王記　1～8 | 8 | 白川仲資王 | 日記 | 阿 | |
| 116 | 366-6-1～2 | 永昌記 | 2 | 藤原為隆 | 日記 | 阿/忍/大 | |
| 117 | 366-8-1 | 享保日記 | 1 | | 記録 | 阿/○ | |
| 118 | 366-9-1 | 嘉応元年記 | 1 | | | 阿/○ | |
| 119 | 366-10-1～3 | 長承三年記　上・中・下 | 3 | | | 阿/○ | |
| 120 | 366-11-1 | 後京極摂政良経公別記　全 | 1 | 藤原良経 | 日記 | 阿/○ | |
| 121 | 366-12-2～5 | 大外記師茂記　2～5(1欠) | 4 | 中原師守 | 日記 | 阿 | |
| 122 | 366-13-1 | 家光卿記　全 | 1 | 日野家光 | 日記 | 阿/○ | |
| 123 | 366-14-1 | 今出川内相府記 | 1 | 西園寺実衡 | 日記 | 阿/○ | |
| 124 | 366-15-1 | 後山本左相府記 | 1 | 藤原実泰 | 日記 | 阿/○ | |
| 125 | 366-17-1～9 | 大御記　1～9 | 9 | 藤原為房 | 日記 | 阿/貞 | 享保8参議右大弁判とあり |
| 126 | 367-1-1～2 | 家記年月考　乾坤 | 2 | | | 阿/○ | 文化７校合源貞雄(花押) |
| 127 | 367-12-1 | 京極摂政師實公家司記 | 1 | | 日記 | 阿/○ | |
| 128 | 367-16-1～17 | 毘沙門堂所蔵記　1～17 | 17 | | | 阿/南 | 55と同本　東都居士源貞雄 |
| 129 | 367-44-1～20 | 外記日記 | 20 | 中原師栄 | 記録 | 阿/鳳/貞 | 寛政８丙辰安田蒼生 |
| 130 | 368-3-1～4 | 後浄明珠院殿御記 | 4 | 二条康道 | 日記 | 阿/○/鳳/貞 | 5と同本 |
| | | 計 | 441 | | | | |

※蔵書印

阿：阿波国文庫
忍：不忍文庫
南：南冥館
鳳：鳳鳥館
立：立習書庫
大：大澤侍従兼久蔵書
生：生島蔵書
貞：安田蒼生(貞雄)蔵書印
○：在々復此の印

※原由美子氏作成目録より再編集した。



家記年月考（森末氏所蔵）

## 森末義彰氏収集の阿波国文庫

### 〔百三十点・四百四十一冊〕

森末氏が戦後まもなく古書店より入手した一三〇点の阿波国文庫本は、天皇の日記や『玉葉』など公家の日記関係の古記録の写本がほとんどである。各冊には「阿波国文庫」「不忍文庫」などの蔵書印が押されているが、国内の和書の総目録である「国書総目録」などにも掲載されていないものもあり、歴史研究の上においても貴重なものが含まれている。

森末義彰氏は、東京大学史料編纂所の職員として全国の古文書の収集に従事し、昭和十一年には徳島県内の史料調査・収集に渡辺世祐氏とともに来県した。その内容は「徳島県下史料蒐集復命書」（『史学雑誌』第四十七編第四号）・「徳島県下史料採訪復命書」（同第四十八編第十二号）として報告された。またこの時の森末氏の控えが「目録」として、残されているが、今は失われている史料もあり、貴重な記録である。

## 洲本市立図書館蔵の阿波国文庫

### 〔総数七百十二点・三千三百八十四冊〕

現在、洲本市立淡路文化史料館に仮に所蔵され、淡路文化史料館収蔵史料目録第十三集「洲本市立図書館伝来の古書目録」として目録も公刊されている阿波国文庫に関係する資料がある。この目録の解題に、柴野栗山旧蔵本である「萬巻楼」の印が押されている本が三三二点一三四〇冊、安政二年（一八五五）以降洲本文武学校で使われたものと説明されている「淡路国文庫」の印があるものが五四点四六〇冊、元治元年に淡路の由良湊に建てられた「進修館」の印があるものが一三点二一四冊、徳島寺島学問所内の洋学所から伝来したと思われる「洋学所」の印があるものが二点七冊ある。

このほか、先山の千光寺（元洲本中学校蔵書か）に三十七冊があり、同じく洲本市立淡路文化史料館に仮に所蔵されている。

「阿波国文庫」の歴史を考える上で、洲本市の史料は、質量とも最重要であると思われる。今後新築された洲本市立図書館に移される予定だそうである。一層の研究の進展を期待したい。

進修館図書記の印（洲本市立図書館所蔵）

洋学所書籍・阿波国印記の印（洲本市立図書館所蔵）

# その後の阿波国文庫

かくして集められた阿波国文庫は、約六万冊といわれ、有名な「源氏物語絵巻」「紫式部日記絵巻」「松浦宮物語」など現在の国宝・重要文化財級の国文学関係の稀覯本をはじめ、漢籍、古文書などを収蔵して旧加賀藩の「尊敬閣文庫」と並んで近世武家文庫の双璧といわれた。

阿波国文庫の収蔵本には蔵書印が押され、その多くは阿波の徳島城内の書庫と、江戸の蜂須賀藩邸に分けて保管されていたと考えられる。

明治維新後、この内の三〇、九〇五冊が、徳島県師範学校付属図書館を経て、大正七年三月徳島県立光慶図書館に移管され、昭和三年十一月二日蜂須賀家と徳島県の間に公式の寄託契約が行われた。昭和七年度末には特別閲覧が開始された。このため全国から閲覧者が来館し、西田直二郎、諸橋轍次、池田亀鑑ら著名な学者の閲覧が相次ぎ、学界に一大センセーションを巻き起こしたという。

しかし残念なことに昭和二〇年七月四日の徳島市大空襲により光慶図書館所蔵の全資料が焼失してしまった。疎開中の稀覯本約六六〇冊は難をまぬがれたが、戦後再建された館舎が、昭和二十五年の出火によりすべて焼失してしまった。

一方、江戸の蜂須賀藩邸に置かれたであろう阿波国文庫は、維新後は三田綱町の蜂須賀邸の書庫に移されたと考えられる。戦災により焼失したものも多かったが、鉄筋コンクリート造りの倉庫に保管された和漢籍が焼失をまぬがれ、昭和二十六年一括して売却された。トラック三台分といわれる蜂須賀家侯爵本の売り立ては、昭和二十六年当時の古書界の大事件であったという。

かくして阿波国文庫は完全に分散した。今回の展示にともなう調査で離散した阿波国文庫の所在をできるだけ確認し、その総体の復元を試みた。

# 専修大学所蔵蜂須賀家旧蔵本〔二十一点〕

専修大学蔵の資料は、全体としては国文学関係の鎌倉・室町期の古い写本を含む稀覯本の類である。なかでも『長秋詠藻』は国の重要文化財の指定を受けている。藩政期は蜂須賀家に中で丁重に取り扱われてきたことが桐箱・漆塗の文書箱などの装備類により推測ができる。

「阿波国文庫」などの蔵書印が押されているのは次の四点であった。

①「二十一代集」、②「伊勢物語」（鎌倉時代写）、③「伊勢物語」（江戸時代写）、④「岷江入楚」、⑤「保元物語・平治物語」

なお二十一点の収蔵本は、昭和五十四年同大学開学百年記念事業として蜂須賀家旧蔵本の完全復刻が企画され、現在十点十四冊が第一期として完成・刊行されている。

伊勢物語江戸時代写本（専修大学図書館所蔵）

「在々復此」の印

## 展示資料目録

| 標　　題 | 作　　者 | 作成年代 | 冊数 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| 日々記 | 蜷川　親元 | | 3冊 | 森末義彰氏収集資料 |
| 御浄明珠院殿御記 | 二条　康道 | | 4 | 〃 |
| 公頼公記 | 三条　公頼 | | 2 | 〃 |
| 後鳥羽院御記 | 後鳥羽天皇 | | 1 | 〃 |
| 野宮内相府記 | 徳大寺公清 | | 1 | 〃 |
| 貞信公記 | 藤原　忠平 | | 1 | 〃 |
| 玉葉 | 九条　兼実 | | 6 | 〃 |
| 玉葉目録 | 九条　兼実 | | 1 | 〃 |
| 後二条関白記 | | | 1 | 〃 |
| 大御記 | 藤原　為房 | | 2 | |
| 古今要覧稿 草木部 | 屋代　弘賢 | | 10 | 徳島県立図書館所蔵 |
| 本朝王代図略図 | 伊勢平蔵貞丈 | 安永８年 | 1 | 〃 |
| 富家語 中外抄 | 源　　実治 | 宝永３年 | 1 | 〃 |
| 両朝時令 | (林　　道春) | 文化７年 | 1 | 〃 |
| 蛍蠅抄 | 塙　保己一 | 文化８年 | 6 | 〃 |
| 明徳記（上中下） | (開板之) | 寛永元年 | 3 | 〃 |
| 十七史商榷 | 王　　鳴盛 | | 5 | 〃 |
| 伊豆海島風土記 | | | 3 | 〃 |
| 如琴如涛 | | | 1 | 〃 |
| 白石先生遺文(上下) | 新井　白石 | 文化11年 | 1 | 〃 |
| 本左録 | 本田　正信 | 天明７年 | 1 | 洲本市立図書館所蔵 |
| 明君享保録 | 馬場　文耕 | 享和２年 | 1 | 〃 |
| 海国図志籌海篇 | | 嘉永７年 | 2 | 〃 |
| 海国図志印度国篇 | | 安政２年 | 3 | 〃 |

※期間中展示資料を一部入れ替えることがあります。


第十七回 企画展
阿波国文庫と淡路国文庫
平成十年十月二十七日 発行

編集・発行　徳島県立文書館
〒770-8070 徳島市八万町向寺山
電話 〇八八六(六八)三七〇〇

印　　刷　原田印刷出版株式会社
〒770-0901 徳島市西大工町四ノ五
電話 〇八八六(二二)二三五六